



[巻頭言]

都市における計画的意志のあり方について

副支部長 紙野 桂人

我が国が内需を振興していかによりの社会資本を充実していくか、諸外国から強い注目が集められている。その中で国は、生活大国の実現を目指す経済計画を発表した。東京一極集中を是正して、国土全体に調和のある都市計画を実現していくことは、社会資本充実の柱であり、いま極めて肝要な課題となった。関西にはその先導役が期待されている。日本都市計画学会関西支部の果たす役割は誠に重いとすべきであろう。

ここで、関西の都市づくり百年を振り返りながらその成果を確かめつつ、今後への期待を述べてみようと思う。

いま関西の各都市を見渡して、近代都市計画の成果としてまず注目されるのは都市公園ではないかと思う。奈良市の奈良公園を始めとして、大阪の中之島公園、京都の岡崎公園そして少し時代は下るが神戸の須磨浦公園などがその代表格となろう。それらはいま、都市の顔として、都市のオアシスとして、市民に、そして全国の心ある人々によって愛されている。奈良公園の自然性、岡崎公園の文化性、中之島公園の水都性、須磨浦公園の海浜性と、都市それぞれの個性を反映してゆるがないものがある。関西の都市は、「都」として城下町としてあるいは自治都市として、そして宗教都市として、実に様々な歴史的骨格の上に近代都市化を進めてきた経過を持っている。その個性が公園として位置づけられ受

け継がれてきていると思う。さらに新しい時代性の反映として、例えば大阪の三大緑地（服部・鶴見・久宝寺）、万博記念公園がある。そしていま、兵庫・神戸臨海、大阪臨海、泉州臨海、和歌山臨海、琵琶湖岸において21世紀に向けた環境創造が始まろうとしている。淀川を始め各都市河川のリバーフロント、リバーサイド整備における空間創造も、緒につこうとしている。それらをして20世紀都市計画の文化遺産とすることが我々に課せられている。

次に都市の街路に注目してみたい。

都市空間の骨格をなす街路にも、必ずその都市の歴史が反映される。京都の烏丸や四条通り、大阪の堺筋や本町通り、神戸の北野・山本通り、などがそれである。ただ公園の場合と違って明治・大正期に新たに開発整備された高規格の街路はあまり目立たない。昭和に入って、大阪の御堂筋が初めて、近代的アベニューの本格的な都市軸として姿を現した。戦後に整備された京都の御池通りは高規格の街路であるが、都市軸としての成熟には至っていない。大阪のなにわ筋あるいは中央大通りにもそれは言える。神戸のフラワーロードも市街地の成熟がいま一歩である。この育成は都市計画の課題であろう。

新しい開発整備には、それまでに蓄えられてきた地域基盤と将来に向けての新しい構想との間の、厳しい対立を生じて何等かの痛み

が必ず発生する。パリのオスマン計画にそれは典型的に現れているし、大阪の御堂筋にも暴挙として批判があった。しかし考えてみると、歴史的都市と言えどもその骨格は嚆矢の開発によって生まれたものである。それなくして、いまの都市はなかったと言えよう。

現代の都市が、過去の蓄積の上で何に思い切ったメスを入れ、どこについて修復や復活

を図り、何を永続的に残そうとするのか、都市におけるその計画的意志の明示が、次の世紀に向けて必要であると思う。歴史的都市の多い関西では、その重みは特に大きい。

次世代の都市のために、大きな資産となりうるものを約束する、強い意志を持った都市計画を、これからの関西に求めたい。

(大阪大学教授)

関西での都市計画と事業

—— 東西軸の都市基盤整備 ——

[大阪市]

大阪の鉄道、道路の交通基盤整備は南北軸が中心に整備されてきましたが、現在は東西軸を強化して、都市整備のバランスを図っている時代といえます。

既に開通している鶴見緑地線や地下鉄中央線沿線に立地して行われた事業として鶴見緑地公園の整備、花博の開催、大阪ビジネスパークの整備、弁天町オーク街開発、天保山ハーバービレッジ開発などが最近の代表的な事業であります。

建設中の東西軸強化事業としては片福連絡線(尼崎—京橋間12.3km)があります。事業費は2800億円で建設工事は関西高速鉄道(株)が担当しています。この沿線には開発中の事業として東は学研都市、市内では大阪ビジネスパーク、ダイヤモンド地下街、西梅田地区、西には三田国際公園都市があり、これらの大プロジェクトを繋ぐ東西幹線として1995年春に完成します。

もう一つの東西軸整備事業は地下鉄鶴見緑地線都心延伸事業(5.6km)1220億円です。この鶴見緑地線沿線では、この秋鶴見緑地公園において国連環境計画(UNEP)国際環境技術センターが着工します。花博の理念を継承して、地球規模の環境問題にとりくむ組織として、大阪に立地する初めての国連機関として

注目されています。長堀通には堺筋から四つ橋筋までの750m地下空間にこの地下鉄に併せて3万5000㎡の地下街と公共駐車場4万6000㎡を含む地下4層の地下街が建設されます。アメリカ村、ヨーロッパ村として親しまれてきたユニークタウンを強化する東西動脈と新しい東西地下空間が加わることによって、ミナミのよさが一層磨かれ、魅力の増し加わることとなります。さらに大阪に不足している全天候型、スポーツ、展示、集会、音楽その他のイベントのための大阪シテイドーム事業が1997年完成を目標に岩崎橋地区に準備されています。鶴見緑地線は将来この岩崎橋地区(17ha)への便利なアクセスとなって東西軸が強化されます。

このようにみると現在大阪でおこなわれている大規模開発の傾向が東西軸を中心に再編成されつつあることがよくわかります。もともと湊を玄関にして水運で栄えた大阪の都心は南北軸は6m東西8mの格子状道路で構成されて、東西軸を主軸としていました。鉄道、道路の時代となって現在のように南北軸を中心に土地利用が成熟し、現在では南北軸には開発可能地が比較的少なくなり、開発可能地を多くかかえる東西軸にプロジェクトが集中するのは理にかなったことです。これらの東西

軸の勢いが長期事業としてのテクノポート大阪計画に連携して水都大阪の舞台が東西軸上に整備されることが期待されています。

南北軸がビジネス軸として開発されているのに対して、東西軸の特性は歴史文化に関する開発プロジェクトが多いことです。今、大阪の都市開発事業がビジネス軸に欠けている要素を耕作して収穫を得ることは時代の要請にかなっています。

もちろん南北ビジネス軸も文化の香りが歎

迎されており、パレードなどのイベントに加え、この夏から御堂筋を世界の代表的な彫刻で美装化する事業が道路管理者と沿道企業の協力によって始められました。

21世紀の大阪を活力ある世界都市として築くために、世界の企業とビジネスマンが大阪で楽しく仕事ができ、遊び、互いに気持ちよく住めるまちとなれるためにこれらのプログラムを進めております。

(大阪市計画局長 仙石泰輔)

— 神戸は今・・・ —

[神戸市]

「神戸から連想されるものは」「神戸を代表するものは」という質問で一番多い回答は「海——神戸港」であり、「山——六甲山」だそうです。

しかし、最近神戸にお越しいただく方に神戸のイメージを伺うと「ポートアイランド」「六甲アイランド」の新しい海上文化都市や「北野の異人館」「酒蔵」など、これまでと違う一面をあげてくださるかたがずいぶん増えてきました。

神戸は慶応3年の開港を契機として、日本を代表する国際港湾都市へと発展してきました。

しかし、神戸は海と山にはさまれ拡大の余地が少ないため、高度成長期に神戸の産業をささえてきた鉄鋼、造船といった基幹産業は生産の拠点を次々と地方に移していきました。

それに伴い、人口の流出現象も顕著となりました。

こうした状況に対処するため、山を切り開き、その土で海を埋め立て、内陸部と臨海部に同時に新しいまちを造り出してきました。

こうして誕生したのがポートアイランドや六甲アイランド、内陸部の西神ニュータウン、研究学園都市、西神工業団地、流通業務団地などです。

ポートアイランドのインターナショナルス

クウェアには、ホテル、国際会議場・展示場やアパレル、真珠、ケミカル・シューズ、洋菓子などのファッション産業の集まるファッションタウンがあり、コンベンション都市、ファッション都市神戸の中核となっています。

第2の海上文化都市である六甲アイランドも、高度情報化・国際化を目指した魅力あるまちづくりを進めており、現在既に約1万人の人が住み、ファッション関連企業の常設展示場が集まる神戸ファッションマートもオープンしました。また、親水性の高いレジャゾーンであるマリンパーク（アミューズメントパーク）の整備も始まっています。

さらに、現在のポートアイランドの南側を埋め立て約2倍に広げるポートアイランド第2期の埋立て工事も始まり、また、神戸沖空港の計画も具体化に向けて進められています。

一方内陸部の工業団地にはこれまで神戸になかった各種の先端産業が数多く進出し、研究学園都市には4つの大学と工業高等専門学校が集まり、市内の産業と連携しながら明日を担う人材の育成に貢献しています。

こうした新開発地の整備のほか都心部の空洞化、いわゆるインナーシティ対策として大規模な遊休地であった旧国鉄貨物駅跡地を中心としたJR神戸駅海側の地域を神戸ハーバーランドとして再開発しています。ここには、

CATVや地域内LANを活用し各種情報提供を行うハーバーランド情報センターが設立され、未来型情報都市をめざし様々な取組がなされているほか、百貨店などの商業施設の建設も進んでいます。平成4年9月にまちびらきが行われますが、神戸の新しい都市拠点として大きな期待が寄せられています。

他方、「北野地区」「旧居留地地区」「南京町地区」など7地域を都市景観形成地域等に指定するなど神戸らしい恵まれた地域的特性を活かしながら、“神戸らしい”まちの景観をまもり、そだて、さらに新しくつくりだしていく、個性豊かで、快適なまちづくりにも積極的に取り組んでいます。

このように神戸市では、海と山の恵まれた自然を背景に、神戸のもつ歴史性を生かしながら、さらに「山、海へ行く」という新しい神戸を創り出すハード面の都市基盤の整備、それに伴うより豊かな潤いのある都市生活を営むソフト面のまちづくりを展開してきました。

こうした、「住み」「働き」「学び」「憩う」という「多種機能型複合都市づくり」に対する積極的な取組みが、美しい神戸港、

緑豊かな六甲山などとともに、「六甲アイランド」「ポートアイランド」の海上文化都市の名声を高め、神戸の魅力を明確にし、神戸のイメージを高める要素となっています。

さて、街はそこに住む一人ひとりにとってまた、そこで働くものにとって親しみと愛着のもてるものだけでなく、そこを訪れる人々にとっても心和むたまたまいをもっていたいものです。

これからのまちづくりにあたっては、快適でうるおいのあるまちづくりへの要請はますます高まりつつあります。

このようなことから、神戸市では、やがて訪れる21世紀に向けて、これまでのまちづくりを継承し、さらに発展させて、すべての人がいつまでも住み続けたい、また、訪れてみたくなる魅力あふれる都市“アーバンリゾート都市”の実現を目指し、神戸の個性と魅力を大切に複合的な機能をもった高次元のまちづくりを図っていきます。その契機として、平成5年4月から9月にかけて、市内一円をステージとした「アーバンリゾートフェア神戸'93」が開催されます。

(神戸市都市計画局計画部長 鶴来 紘一)

わたくしの職場

— わが職場の女性進出度は如何に —

住宅・都市整備公団（関西支社）

ある日の昼食時、わが公団の社員食堂で、2人のおばさん（外部の人）がキョロキョロしながら「この会社は女の人が入ってへんね」と、ヒソヒソ話をしているのが聞こえてきました。

今や女性の社会進出が著しい時代にあって、わが職場に女性は極めて少ないのが現状です。もっとも公的ディベロッパーとして、住宅建設・宅地供給・都市再開発、そして住宅管理を4本柱に事業を進める、いわば不動産業を

ナリワイとしている職場であれば、女性が少ないのもっともかもしれません。

そこでクイズを1問。公団職員は全社で約5000人いますが、このうち女性技術者（建築・土木・造園）は何人いるでしょうか？

答 ① 200人 ② 100人 ③ 20人

ヒント：全職員に占める技術者は半分の約2500人です。又、女性職員の数は、たかだか約250人、なんと5%たらずなのです。さて正解は、③の20人。0.4%しかいません。

では、関西支社はどうか。全職員1000人のうち、女性職員は約50人です。さらにこのうち技術者は8月現在で、建築職1人、土木職1人の計2人しかいません。どうりで職場がムサクルシイ、などとは言わないで下さい。幸い(?) 近年やはり、わが公団も遅まきながら女性の数が増加する傾向にあり、なんと平成4年度には一挙に7人の女性技術者(建築4・土木2・造園1)が入社、前代未聞の出来事が起こったのです。

— まちも職場も Fusion だ !? —

我々の事務所は、別名アルパックとも名乗っておりますが、これは創業時に Architects, Regional Planners, Associates の後ろに、当時から本社のある京都のKをくっつけて ARPAK としたものです。元々、京大の西山研究室で大阪万博の会場計画に携わったメンバーが中心になって、プランニングコンサルタント事務所としてスタートしたと聞いております。(当時、私は中学生でしたから知りません)

地域主義・現地主義を基本に、その地域の様々な情報の収集・蓄積をしながら、研究者、実務家とのネットワークを中心にグローバルな視点で、地域課題の解決を図る為の具体的な提案をして行くというのが我々の業務の大部分を占めます。業務分野は①広域計画・総合計画、②市街地整備・再開発、③交通計画・港湾計画、④環境管理計画、⑤建築計画・設計などの分野にまたがっており、それぞれの地域課題を総合的に解決するための機能を充実しようとしています。

関西では京都と大阪に事務所があり、その他の地域では、東京、名古屋、福岡に事務所があり、それぞれの地域事務所として活動しております。京都、大阪の2つの事務所の技

さて、生活大国をめざし、多様化する今後の生活ニーズに向けた「まちづくり・いえづくり」に、公団の使命は大きく、益々活気のある職場になってゆくものと思います。願わくば、新しい生活空間ひいては生活文化の創造にむけて、これまでのマストラオ中心の職場から、タオヤメのやわらかいパワーが溢れる職場になってほしいものです。

(都市再開発部再開発課長 千葉 桂司)

(株)地域計画建築研究所 (アルパック)

術系スタッフの構成は、出身学部別に見ると、建築・住居系で39名、土木系9名、環境(衛生、化学など)6名、経済・社会・地理など社会科学系7名となっており、都市計画コンサルタント業界でも、建築出身のスタッフの多い方ではないでしょうか。

仕事を進めて行く上での面白さは、たとえば些細なことでも新たな発見があったり、多方面の専門家や現場の人との出会いなど様々です。個々のスタッフは専門性を高めるよう特定分野の業務を行っていますが、時にはその希望も配慮して、全く異なる分野の業務を協同して遂行することもあります。例えば都市の市街地整備や再開発ばかり扱っている人が、地方振興計画などソフトな計画づくりに携わるといったことで、違う視点から問題をみる機会を得られたり、地方に友人や大げさにいえば新たな故郷を得られたりすることがあります。さまざまな分野の人が集まってきて、ワイワイと他人の計画に口を出すような事務所のあり方が、ある意味で都市計画的ではないでしょうか。

(第4計画部次長 堀口 浩司)

総 会 報 告

日本都市計画学会関西支部の1992年度総会は、1992年5月13日（水）午後1時30分より、大阪市立大学文化交流センターで行われた。当日は天野光三支部長はじめ57名の支部会員が出席し、233人の会員が委任状を提出して審議に参加した。

総会では、天野支部長の挨拶に引き続き、大阪府道路公社副理事長の西村増雄氏を議長に選出し、次の4つの議案について報告ならびに審議が行われた。

- 1) 1991年度日本都市計画学会関西支部活動報告
- 2) 1991年度日本都市計画学会関西支部決算
- 3) 1992年度日本都市計画学会関西支部活動方針案
- 4) 1992年度日本都市計画学会関西支部予算案

以下に、各議案について概略を記す。

1991年度の支部活動報告に関しては、森康男総務委員長から、以下の報告が行われた。

- ①幹事会ならびに各委員会（総務委員会、企画・事業委員会、会員・会計委員会、編集・広報委員会）が1991年10月～1992年3月までの期間にそれぞれ3～5回開催され、支部活動が活発に展開されている。
- ②本支部の事務局を財団法人大阪都市工学情報センターに設置し、円滑な支部活動を進める体制を整えた。
- ③「委員会の設置に関する細則（1991年12月3日施行）」、および「研究会の設置に関する細則（1992年4月20日施行）」を支部規程第23条の定めに基づき幹事会の議を経て定めた。
- ④個人会員ならびに賛助会員は、1992年3月31日現在それぞれ701名、95名である。賛助会員に関しては、賛助会員対策臨時委員会を設けて入会促進を図っている。
- ⑤第1回研究・交流会が、「ウォーターフロ

ント開発－課題と提案－」と題して、1992年2月19日に開催され、40名が参加した。

- ⑥支部だよりを1992年3月に発行した。
- ⑦日本都市計画学会本部が受託した以下の2件の研究を当支部で実施している。
 - a)大阪ベイエリアの住宅・住環境整備方向に関する調査研究（委託者：積水ハウス、受託期間：1992年1月10日～1992年6月30日、委員長：紙野桂人）
 - b)大阪ベイエリア「ニューハウジング」プロジェクトの研究（委託者：住宅都市整備公団関西支社、受託期間：1991年12月10日～1992年3月20日）

なお、受託研究に関しては、契約額の7%が交付金として支部に交付される。

次に、西村昂会員・会計委員長から1991年度の決算報告ならびに1992年度予算案に関する提案が行われ、承認された（詳細は会員・会計委員会報告を参照されたい）。

1992年度の活動方針に関しては、森総務委員長から以下の提案があり、承認された。

- ①都市計画シンポジウムを1～2回開催する。第1回目は、総会当日に「都市政策と駐車問題」と題して行う。
- ②研究・交流会を隔月に実施することにし、「高齢者・身障者にやさしいまちづくり」、「都市の立体的利用（仮題）」、「都市基盤施設と景観（仮題）」等を予定している。
- ③研究・交流会と併せて見学会を必要に応じて開催する。
- ④支部会員の活発な自発的研究を奨励するため、「研究会の設置に関する細則」に基づき、調査研究会を設置する。今年度は2つの研究会を設置し、1研究会あたり100,000円を助成することを予算化する。
- ⑤支部だよりを年2回発行するとともに、その他広報について必要な事業を行う。
(総務委員 塚口博司)

委員会報告

[企画事業委員会報告]

I. 予告

第2回都市計画研究交流会を下記の要領で開催しますので、参加希望者は事務局宛てファックスで申し込んで下さい。

テーマ：道路空間の立体的利用（仮題）

日時：1992年10月27日（火）

13:30-16:30

参加費：1000円

見学会と講演会をあわせて行ないませんが、参加場所は参加申し込み者に後日連絡いたします。

II. 報告

本年度事業としてこれまで、都市計画シンポジウムおよび第1回都市計画研究交流会を開催した。それらの概要は以下のとおりである。

1. 都市計画シンポジウム

1992年度関西支部総会終了後、下記の要領で都市計画シンポジウムを開催した。

テーマ：都市政策と駐車問題

日時：1992年5月13日（水）14:30-17:30

場所：大阪市立大学文化交流センター
「ホール」

参加費：1000円

発題者：塚口博司<京都大学助教授>

中村正治<大阪市計画局交通政策
室主幹>

小西 桂<（財）都市交通問題調
査会理事>

小谷通泰<神戸商大学助教授>

司会：鳴海邦碩<大阪大学教授>

概要

1). 都市政策と駐車問題の背景と現状

<塚口博司>

駐車問題は違法路上駐車を増大を背景に、路上駐車存在から直接あるいは間接に生じる諸問題である。その抜本的解決は都市交通全体の議論なくしては困難である。

駐車問題について考えるためには、広域的な都市交通計画の中で捉える視点と、地区の実情に応じてきめ細かな対応を行なう地区交通計画の視点が必要である。

現実的な駐車対策メニューとして次の4点があげられる。

- ① 適切な規模の駐車施設整備
- ② 既存の駐車施設の有効利用
- ③ 社会およびドライバーの意識向上
- ④ 駐車需要の適切なコントロール

自動車交通をどの程度受入れ、抑制するか等、広域的な対応を必要とするとともに、地区特性を踏まえたきめ細かな対応も必要である。

都市空間のどの程度を交通空間として割り当てるかを改めて論じる必要がある。短期的には、駐車需給バランスがくずれているため、どのようにして誰が整備していくかが問題である。長期的には、駐車場を整備する場合にも、どの程度整備すればいいのかという目安が必要である。

2). 都市政策と駐車政策の課題：大阪市の事例から <中村正治>

車保有については、世帯保有から個人保有へと移行しつつある。

駐車施設は、車を使う時に必要な駐車場と、車を持つ時に必要な保管場所（車庫）にわけられる。

車社会の成熟化に伴って、駐車場業はビジネスとして魅力を増すべきではないか。つまり、料金がもう少し高くないと経営として成立しないのではないか。車を保有するからに

は、費用（料金等）がかかること、さらにはゆずりあう心、使用者の自覚が必要ではないか。

大阪市では、駐車問題に対する基本方針として、次の4点を柱とする駐車場基本計画を策定した。

- ① 駐車需要の抑制
- ② 駐車スペースの有効利用と拡大
- ③ 取り締まりの強化
- ④ マナーの向上

施策として、駐車場整備地区の指定地域の拡大、附置義務基準の強化、公共駐車場の整備、民間駐車場への助成等を行なっている。

3). 立体駐車場業界および民間駐車場の現状と今後の動向 <小西 桂>

大阪市内で約1万6千台の車庫が不足している。車の使用者の問題としては、2割の使用者が駐車場へ入れる気持ちがないというデータもあり、マナーの問題もある。

民間駐車場についてみると、現状では、月極め駐車場が大半であり、空いているときに一時預かりをするというのが傾向としてある。

最近では、月極めだけでなく、定期貸し等、多様化してきている。一時預かりで24時間営業できるところは、その方が有利であるが、そういう手法をとれるところのごくわずかである。

共同住宅については、100%の駐車場の設置率、テナントビルにおいては、1/3程度の駐車場を確保しないと、利用されないというように最近ではなっている。

生産緑地法による駐車場への転用という動きが最近は見られる。タワー式駐車場については、都市の景観場の問題がある。

4). 諸外国における交通管理対策の動向：路上駐車対策と関連させて <小谷通泰>

交通管理対策として次の3点がある。

- ① 道路交通の再配分
- ② 交通静穏化対策
- ③ ロードプライシング

上の観点に沿いながら、以下のテーマに関

連した海外事例の紹介が行なわれた。

- ① 道路交通の再配分と都心部の路上駐車
- ② 交通静穏化対策と住宅地区の路上駐車
- ③ 総合的交通需要管理と駐車需要のコントロール

5). 意見交換

ここでの紹介は省略するが、上記の発題に基づいて、活発な意見交換が行なわれた。シンポジウムは近畿大学三星研究室の手でビデオ収録してある。貸出しが可能なので、希望者は事務局まで申し出て下さい。

2. 1992年度第1回都市計画研究交流会

都市計画研究交流会を下記の要領で開催した。

テーマ：高齢者・障害者にやさしいまちづくり

日時：1992年8月1日（土）13:30-16:30

場所：大阪第一生命ビル19F会議室

参加費：1000円

発題者：荒木兵一郎<関西大学教授>

三星昭宏 <近畿大学助教授>

卯田隆一 <京都市住宅局理事>

中川達哉 <大阪府企画調整部企画室参事>

司会：田中直人 <神戸芸術工科大学助教授>

概要

1). 福祉のまちづくりの動向と展望

<荒木兵一郎>

2). 高齢者・障害者のモビリティとまちづくり <三星昭宏>

3). 京都市の福祉のまちづくり：健康都市の実現に向けて

4). 水と緑の健康都市：長寿社会にふさわしいまちエイジレスタウン

5). 意見交換

以上については、追ってもう少し詳しい内容をお知らせしたい。なお、この研究交流会

の様もビデオ録画してあるので、借り出し希望者は事務局まで申し出て下さい。

(企画事業委員長 鳴海邦碩)

[会員・会計委員会報告]

今年の4月以降の当委員会の活動は、5月の支部総会に向けての収支決算および新年度予算案の編成という2つの議案づくりであった。1991年度の収支決算は、当支部初めての会計監査を受けるために残りの予算の執行、帳簿、証ひょう書類の整理などが事務局の池田さん、真鍋さんの集中的な作業によって予定通り終了し、1992年予算案をも含めて委員会案を作成し、支部幹事会での議論を経て総会に提案する議案を作成した。会計監査も無事終了した。支部総会で承認を得た収支決算および予算案を項目を簡単に示すと以下のよ

うである。1991年度は半年間であったため繰越金はかなり出たが、この一部は新年度で積立基金に繰入れることとし、将来のために残すこととした。この積立基金は今後、毎年可能な範囲で積み足していくこととなった。なお詳しくは、総会議案書を参照して頂くか支部関係役員にお問合わせ頂きたい。

賛助会員の増強についてもこれまでの役員会全体での取組の成果があらわれて徐々に増加している。今後もさらに増強が必要であるので会員各位のご協力をお願いする次第である。(会員・会計委員長 西村 昂)

1991年度日本都市計画学会関西支部決算

1. 収入の部

大科目	中科目	予算額	決算額	増減	摘要
会費		2,635,000	3,573,000	+ 938,000	支部交付金
事業収入	事業参加費	100,000	27,000	- 73,000	定期交流会参加費
その他収入	利息等	--	3,316	+ 3,316	銀行利息
収入合計		2,735,000	3,603,316	+ 868,316	

2. 支出の部

大科目	中科目	予算額	決算額	増減	摘要
管理費		1,500,000	893,241	- 606,759	
事業費	事業費	300,000	119,590	- 180,410	事業企画(交流会)経費
支部設立準備補填費		200,000	478,423	+ 278,423	支部設立準備金不足額
予備費	予備費	35,000	0	- 35,000	
繰越金	次年度繰越	700,000	2,112,062	+1,412,062	
支出合計		2,735,000	3,603,316	+ 868,316	

1992年度日本都市計画学会関西支部予算

1. 収入の部

大科目	中科目	予算額	摘要
会費		4,461,000	支部交付金
事業収入	事業参加費	100,000	定期交流会・シンポジウム参加費
繰越収支	繰入金収入	2,112,062	前年度より
収入合計		6,673,162	

2. 支出の部

会費	中科目	予算額	摘要
		3,041,950	
	給与手当等	150,000	広報、その他、アルバイト
	会議費	462,000	幹事会および各委員会
	旅費交通費	304,000	幹事会および各委員会
	通信運搬費	329,400	企画委、広報委、事務局
	消耗品費	200,000	封筒、ゴム印、領収書類等
	事務局運営費	1,200,000	事務所使用経費、事務員給与、事務経費
	受託研究事務	396,550	1991年度分2件
	事業費	990,652	ニューズレター発行(300,000)、 定期交流会等(300,000)、 1992年度総会(190,652)、 自主研究(100,000×2)
予備費	予備費	40,560	
積立基金	積立基金支出	1,000,000	
繰越金	次年度繰越	1,600,000	
支出合計		6,673,162	

ヨーロッパのまちと日本のまち

新聞の書評に釣られて、内田芳明「風景とは何かー構想力としての都市ー」(朝日選書)を買った。著者は本職は経済学者だが、都市景観について興味を持ち、本を書いたらあちこちで講演を頼まれるようになったそうである。読んで失望した。こんなことなら誰にでも書ける。ヨーロッパの都市は中世の街並みがそっくり残っていて、地方産の赤茶色の屋根瓦で統一がとれて美しい。中を改造して住みやすくしたら古いまちに人が戻ってきたというのである。それにくらべたら日本はがらくただと。日本人は昔から木と壁土と紙で、造っては壊し、つくっては壊ししてきた。30年前の「たてもの」はもう古いのである。だからどうしたらいいかを考えなければならないのに。(俊)

編集後記

「関西支部だより」第2号をお届けします。昨年10月支部設立以来各種委員会活動、シンポジウムや研究・交流会の開催等と初年度より活発に事業が行われて来ております。2年目に入り、支部だよりも新しいコラムを設け、内容の充実をはかりました。今後は定期的に年2回発行(9月・3月)とし、支部だよりにふさわしい内容にしていきたいと思っておりますので、御意見等ありましたらどしどしお寄せください。(F)

関西支部だより 第2号 平成4年9月16日発行
編集発行 社団法人 日本都市計画学会関西支部
大阪市中央区徳井町2-3-2
住友生命大商東ビル2F
財団法人大阪市都市工学情報センター内
(TEL: 06-942-7711, FAX: 06-942-7722)